「基礎教材　建築環境工学」

垂水弘夫 監修　鍵直樹・円井基史・小﨑美希・冨田隆太 著

単行本，181ページ，定価2,700円+税
（井上書院，2017年8月30日発行）

建築環境工学とは，端的に述べれば，安全性だけでなく快適性も考慮した，理想的な室内環境や都市環境を創造するための方法を究明する学問である。より具体的には，建築伝熱，建築湿気などの建築物の物理的な性状を扱う分野や，空気環境，熱環境，光環境，音環境に関する快適性などを扱う人体生理学的な分野などで構成されている。最近では，世界的なエネルギー問題や環境問題に対する人々の関心の高まりから，エネルギー消費の最小化や，地球温暖化防止などの観点も加えられ，様々な社会的なニーズに合わせた建築物を創造するための学問として，日々進化し続けている。また，2009年より，建築環境工学に関する科目が一級建築士国家試験に新設され，近年，ますます建築環境工学の重要度が増してきている。

本書は，建築環境工学の基本分野である空気環境，熱環境，光環境，音環境の基礎について，詳細かつ分かりやすく書かれている。第1章では，主に建築環境工学の歴史や現在の活動などがまとめられており，章の最後には，次章以降の各章のアウトラインが書かれている。第2章の空気環境では，日本でも問題となったシックハウス症候群やアスベストに関する問題が例として紹介されており，これらの原因となるような汚染物質を室内に滞留させないための，空気の流れの基礎や換気回数の目安などについて詳細に書かれている。第3章の熱環境では，熱移動の基礎や熱環境における快適性などについて書かれており，第4章の光環境では，視覚に関連した項目を扱っている。第5章の音環境では，一般住宅やコンサートホールなど，建築物の用途に合わせた音の伝搬や遮音計画などについて書かれている。

本書は，図や表が多用されており，感覚的にも内容を理解しやすいように工夫されている。建築環境工学に興味をお持ちの方には，最初に読んでほしい一冊である。また，各節の終わりには，その節に関連する建築士試験の例題が用意されているため，建築環境工学を基礎から学びつつ，建築士試験のイメージも掴める，一石二鳥な良本である。

（静岡県立大学 徳村雅弘）